

医療従事者のあり方についての一考察—サモア国の事例から—

岡 美也子 梅木 弥生

奈良県立三室病院 中央臨床検査部

はじめに

医学概論において医学とは「単なる生命の学ではなく、病気治療の学であり、さらに病気を予防し、進んで健康を保持し増進する学である」としている。医療従事者は、職業ごとの専門教育を受けて、その責務を果たしてきた。近年「従来の医療は病気の治療結果が第一で治療過程を含む患者の満足度は軽視されていた」などに代表される批判を受けて、医療は人とのかかわりを重視した医療へと移行しつつある。しかし、住民も含め医療従事者はともに国家の医療システムに組み込まれており、日常の医療の現場で具体的な行動につながるような検討の場が出てくるような状況ではない。人とのかかわりを重視した医療にむけて、医療従事者は、自分たちを取り巻く「当たり前」の医療を見直し、医療の恒常的な関与者として医療を見直す中心的役割を担うことが期待される。

研究の目的

医学の発展に伴って生まれてきた臨床検査、臨床検査技師の事例考察を通して、人とのかかわりを重視した医療実践のための針路、特に医療従事者のあり方を考察する。

研究方法

日本における臨床検査をめぐる医療の現状の整理と、サモア国における臨床検査をめぐる調査をとおしてみえてきた現代医療の特性の一面を描き出し考察を行う。

結果と考察

1、医療従事者が医療の発展や広がりへの媒介者となっている。

医療には、医療従事者の資格制度や、医療の中核部分である西洋地域と周辺部分の発展途上国地域に存在する地政的な力関係を背景にした権威性が認められる。医療の技

術・知識は次々に創出されており、新技術・新知識の伝達は医療従事者から住民へと一方向である。この際に、病院、診療所はリレー式に伝達される技術・知識の最終到達点、医療従事者はその最終伝達者であった。そのため、医療実践の場では、医療従事者が医療技術・知識の評価や取捨選択を主導する場合がほとんどとなり、現代医療に対する批判につながっている。医療従事者は、医療の場において、医療従事者の主導による一方的な医療実践の傾向があることを自覚する必要がある。

2、医療における医療産業依存の現状において、医療従事者が人とのかかわりを重視した医療にむけて促進者の役割を果たす可能性がある。

一般的には、医療従事者と患者が出会う臨床の場が人とのかかわりを重視した医療の構築の現場となり、両者が医療のあり方を模索する中心的な行為主体となると考えられる。しかし、医療の実像は、医療産業、物流システム、道路交通網などの複合的な整備によって可能となった工業医療品の安定供給に依存しており、それぞれの分野で就労する人々を含めると、医療の成立には多くの人々が関与している。医療への恒常的な関与者である医療従事者が、人とのかかわりを重視した医療へ向けての促進者としての役割を担って、多くの人を巻き込み、具体的な実践に結び付けていく可能性が指摘される。

発表では、結果と考察を導いた事例について紹介する。